

## 「差別」と「気づかい」

小 六

私のおじさんは、過去にオートバイを運転してしまいました。しかし、事故で足をけがしてしまい、今は車いすで生活しています。おじさんは、とても静かで、あまりしゃべらない性格です。お父さんの兄で、小さいころから落ちていた人だと聞きました。家がはなれていて、お父さんの実家に行ったときに会いに来てくれました。お正月はみんなが集まって食事をしていて、その時が一番、みんなが集まって会話をしたり、ゆつくりしたりしているように見えました。会う機会も話す機会もほとんどないけれど、毎回見るだけで、

おじさんはやさしい人なんだということが分かりました。でも、やっぱり「車いすはきつと不便なんだろうな」と私はずっと思っていました。特に車に乗ったり降りたりするのが大変で、げん関口に行くのも少し時間がかかっていました。でも、私はただ見ていることしかできませんでした。

去年の春ごろ、おじいちゃんが亡くなっておそう式が行われることになりました。私も妹もいっしょに行き、おじさんも来ていました。その日は雨が降っていて少し寒く、そうぎ場の大きなお寺でひと息ついてからおそう式を進めてくれる人が案内してくれました。「二階になります。」

そう言われて目を向けたその先には、大きくて長い階段がありました。

「あらら、車いすじゃのぼれないね：  
：。」

とおばあちゃんが言いました。私はこのとき初めて知りましたが、おじさんが階段をのぼるためには、一度車いすから降りて階段に座り、こしだけを上げて一段ずつのぼるしかありませんでした。家族や親せきが、手伝おうとおじさんの周りに集まっていくと、

「いいよ、自分でのぼるから。だいじょうぶだよ。」

と手助けを断っていました。私は、このおじさんの行動がすごく不思議で、ずっとモヤモヤしていました。そのモヤモヤをかかえたまま、おそう式は進み、あつという間に終わりのときが来ました。

「みなさんおつかれさま。今日はあり

がとうございました。」

そう言って解散していき、私たちも家に帰りました。

次の日、まだお寺でのことが気になって考えていました。どうしておじさんはみんなの手助けを断っていたのだろう。もし、自分が車いすで生活していた、おじさんの立場だったら、助けてほしいし、近寄ってきてくれるのはうれしい。ますます考えこんでいると、ふと、お寺でのお父さんの言葉を思い出しました。おじさんを見ていたとき、お父さんが

「きつと、特別あつかいされるのがいやなんだよ。」

と言っていました。このしゅん間、ずっと頭の中にあつたモヤモヤが消えたような気がしました。確かに、周り

の人が気をつかってくれるのはうれしいけれど、他の人たちがう目で見られたらとても悲しい気持ちにもなると気が付きました。そして、それがいきすぎると、差別にもなってしまうと分かりました。おじさんは「車いすに乗っている」という理由だけで特別あつかいをしないでほしいと思っていたんじゃないかなと思います。いつ、自分に何が起こるか分からない。だから他人事のように考えてはいけないし、一つの理由でいきすぎた気づかいをして、相手をいやな思いにしないでほしいと思います。

実際、お寺でも、周りにいた人は、おじさんを傷つけようとしたわけではないと思います。しかし、「手伝おうか？」というこの言葉が、相手によつ

ては、「あなたは私とちがうから。」という風に聞こえる人もいるかもしれない、ということを知ってほしいと強く思いました。

私はおじさんから大事なことを学びました。それは、「人によって感じ方もちがうし、言った言葉をどう受け取るかも人それぞれだ」という大切な思いやりの心です。ずっと立って見ていることしかできなかつたけれど、この心をもつて、もっとおじさんに寄りそっていききたいです。